

浅沼一也さんとの出会いは2016年、知人を介して「ALSを発症したラーメン屋さんの相談に乗ってもらいたい」と紹介されたことがきっかけだった。当時の僕にとって「ALS」とは抗えぬものの象徴であり、そこに希望の光が射し込む余白すら感じられず、無意識のうちに向き合うことを避けていた。それでも、「残りの人生を使ってやりたいことがある」と話す浅沼さんの言葉に導かれ、何かサポートできることがあればと、交流事業を始めることになった。

以来毎月のようにイベントを企画し、子どもたちとお腹いっぱい食べたり、一緒に遊んだり、おしゃべりできる場をつくり続けてきた。病気のことを発信し、考える主体を増やすことに力を注いできた。生きている痕跡を日々に焼き付けていくように。いつしか「浅沼さんのために」が「浅沼さんと一緒に」へと変わっていった。たくさんの仲間と出会い、またいくつかの別れもあった。ALSとの闘いはまもなく10年目を迎える。

実は本企画『bookmark』がスタートしたのは、浅沼さんに「やりたいことがあるなら」と背中を押してもらったことによる。時に父と子のように、時に兄と弟のように... そんな不思議な関係だ。

新しい年

これからも上野原で問いが生まれる場を続けていくために、浅沼さんの言葉から始めたい。

「私たちにできることはまだまだある」

logue 井上真吾

● 浅沼一也（あさぬまかずや）プロフィール

1966年生まれ。日野市在住。

相模原市内でラーメン屋を営んでいた2016年の誕生日に難病ALSと宣告される。友人らとNPOを設立し、児童養護施設やファミリーホームなどで生活する子どもたちと「食」を通じた交流事業をスタート。現在はボランティアグループ「チーム浅沼屋 for Children and ALS」の代表として、事業の傍らALSの啓発活動に取り組んでいる。



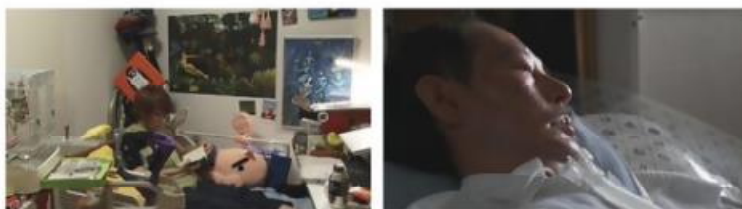
● 一作品あらすじ

「私の声を奪うな 私をいなかったことにするな」

全身の筋力が徐々に弱まり、病状の進行によっては声も失われ、意思を伝えることもむずかしくなる難病ALS（筋萎縮性側索硬化症）。病を発症し、生死のはざまに揺れる一人の女性が、生を証するように詩を綴る。ある日めぐり合う、同じ病を生きる先行者。「私もいま迷いの中にいます」。声を失った男性は、透明な文字盤を介し生きることを一緒に考えたいと告げ、ふたりは長い旅をはじめ。3年半にわたる別れと出会いを、映画スタッフはともにする。やがて「身体に閉じ込められる」かのように、眼の動きも微かになる日。それでも呼びかける者たちを支えているのは何だろうか？

“私”を失いつづける日々に、言葉がのこされる。

言葉も失われた先で、人はいのちに触れる。



● 障害福祉サービス ログ



駐車場の数が限られておりますので、なるべく公共交通機関でお越しください。駐車場ご利用の場合は、事前にご連絡をお願いします。



〒409-0112 山梨県上野原市上野原2075-1

Tel: 0554-67-8680 | Mail: info@logue00.com | Fax: 0554-67-8681 | HP: <https://logue00.com>

[アクセス] 最寄り駅: JR中央線「上野原駅」富士急バス「本町一丁目」もしくは「本町三丁目」下車 徒歩4分 駐車場5台（無料）